

野幌森林公園でタヌキを再確認

(平成20年度野幌自然環境モニタリング調査結果概要)

北海道森林管理局では、「百年前の原始性が感じられる自然林」の再生活動を実施している野幌森林公園（江別市ほか）の自然環境変化を把握するため、18年度から、森林植生、歩行性甲虫相、菌類相、及び野生動物の4項目について調査を実施。

1 調査箇所（森林植生、歩行性甲虫相、菌類相）

- ①平成16年秋の台風による風倒後、主として重機を用いた地拵を行った後、植樹などの森林再生活動が行われている箇所（「再生活動地」という。）
- ②風倒木を搬出後、植栽なしの箇所（「半処理区」という）
- ③風倒後、試験的にそのまま保存した箇所（「非処理区」という）
- ④野幌を代表する林相を有し、風倒被害をあまり受けずに現存する「百年前の原始性」が感じられる森林（「良好な自然林」という）
- ⑤風倒被害を受けていない人工林（「無被害人工林」という）

2 森林植生

良好な自然林については、30m×30mのプロットを設置し、プロット内の樹木の樹高・直径、植物の被覆度等を測定。他の調査箇所については、5×5mプロットを3～5ずつ設定し、出現する植物を記録。

(1) 良好な自然林（3箇所）

①シナノキ・ヤチダモ・ハルニレ林

シナノキ・ヤチダモ・ハルニレが上層木本数の約6割を占める（最大樹高31m）が、中層木は少ない。林床はクマイザサが約9割。

②エゾマツ・落葉広葉樹林

上層木本数の約3割が針葉樹（最大樹高31m）。他に、アサダ、シナノキ、オヒョウなど。林床被覆の約9割はクマイザサ。

③ハルニレ・ヤチダモ林

上層木本数の約5割がヤチダモとハルニレ（最大樹高29m）。ほかにカツラ、シナノキ、ハリギリなど。林床はハイヌガヤが約8割。

(2) 非処理区（1箇所）

ノリウツギ、ヤマグワなどの非高木性樹種が多いものの、ヤチダモ、ヒロハノキハダ、ウダイカンバなどの高木性樹種も3.7千本/ha発生。トドマツ稚樹も散見された。蔓類の繁茂が顕著だった。

(3) 半処理区（1箇所）

ヤマグワ、タラノキ、エゾニワトコ等の非高木性樹種が繁茂し、高木性のものは4.1千本/ha（ミズキ等）程度。ササ類の被覆が多い場所もあるが急激な拡大は見られない。

(4) 再生活動地（5箇所）

①植栽木：針葉樹の伸びは昨年同様またはそれ以上に成長しており、ケヤマハンノキの一部は既に3mを超えて成長。

②天然更新の状況：5箇所とも高木性樹種が多数発生（3.2千～21.2千本/ha）。



(シナノキ・ヤチダモ・ハルニレ林)



(非処理区の様子)

4 歩行性甲虫相

ピットフォールトラップにて歩行性甲虫を捕獲することにより調査を実施。

- (1) 20年度の総捕獲種数は79種（19年度は75種）。

捕獲頭数はこれまでの8割に減少した。

捕獲数減少の原因としては、天候不順とアライグマと思われる動物によって、捕獲用のカップが掘り返されたためと考えられる。



(エゾマイカブリ)

- (2) 再生活動地では、依然として畑や荒地など開放地に生息する種の出現比率が高く、森林性の種の増加は見られない。

5 菌類相

一調査箇所あたり50m×5mの帯状区を2本設定し、木材腐朽菌の子実体を調査。

- (1) 調査区の状況は以下のとおり。

	再生活動地	自然林	無被害人工林
全区で見られた種	ウスノシハイタケ		
特徴的な種	カワラタケ、 レンガタケ	カワラタケ、 サカズキカワラタケ	モミサルノコシカケ
特徴	・スエヒロタケが減少し、 レンガタケが増加。	・出現種総数が多く、特 定種が優先している状 況は見られない	・再生活動地と天然林区 の中間を示す

- (2) 再生活動地では、残存する枯死木に生息する菌類の減少が若干見られたが、依然として切り株や枯れた木に生息する種が多い。



(カスガキワラタケ)

6 野生動物

自動撮影装置を12箇所に設置し、夏と秋の2回夜間撮影を実施。

- (1) 撮影頻度が最も高かったのはキツネ。以下、順にネコ、ネズミ類、コウモリ類、エゾリス、アライグマ、タヌキ、エゾシカ。
- (2) 特定外来種のアライグマは7箇所、森林再生への影響が懸念されるエゾシカは1箇所撮影された。両種とも生息状況に大きな変化はみられない。
- (3) 平成19年6月には撮影されなかったタヌキが6月と9月に撮影された。



(タヌキ)

問い合わせ先：北海道森林管理局 石狩地域森林環境保全ふれあいセンター

〒064-0809 札幌市中央区南9条西23丁目1-10

TEL : 011-533-6741 E-mail : h_ishikari_f@rinya.maff.go.jp